

○アメリカネナシカズラに関する最近の知見 (浅井康宏) Yasuhiro ASAI:
Cuscuta pentagona Engelm. established in Japan

筆者がアメリカネナシカズラの帰化について報告(植研 50: 238-242, 1975)して以来、約10年を経過した。この間、本種の侵入、分布あるいは生育状態などについては、多くの関係諸氏、就中農・園芸関係者により俎上にのせられ、種々の立場から報告が行われるに至った。それと共に全国各地から多くの貴重な資料が筆者のもとによせられ、詳細な検討を加える機会を得ることが出来た。

一方、筆者自身が実際に踏査、実見した範囲内においても、北は北海道から南は沖縄に至る各地の向阳草地、特に海浜のハマゴウやハマヒルガオなどに寄生し、例えば植物体の大きさなどは異なるがアメリカ合衆国の海浜砂地での *Cuscuta salina* Engelm. を彷彿させるような、旺盛な生育状態を示しているのが実状である。それと共に単なる帰化雑草的な存在から、農耕地における有害植物としての影響も問題視されるに至り、未だ局所的な感もあるが、もはや予備帰化植物の段階を脱した状態にあると判定される。

なお一部で本種をハマネナシカズラ(これ自体についての関連問題は、別に稿を改めて述べる予定である)と混同し、同定、公表されているのが実状である。例えば近年、公刊されている可成り権威あるカラー図説のみならず、各地のフロラやカラー図鑑に、本種を誤ってハマネナシカズラとして掲載しているのが散見される(因みに筆者が依頼を受けて生品につき調査した範囲内でも、遺憾ながらハマネナシカズラとされている大部分のものが本種であった)。しかし、たとえ生育環境が同一で、植物体の形状が酷似していたとしても、花部の形態を観察すれば直ちに区別でき得るもので、各地のフロラ調査関係者の注意を切望したい。

ところで本種の我国での広布に伴い、その学名に関する意見が輩出し、筆者に対しても現在まで直接あるいは間接に、その見解を求められてきた。この点については既に本種の存在を最初に報告した際に、原産地における実状をも勘案し、その同定の困難さについて触れると共に、今後の検討の必要性を披瀝しておいた。その後、筆者自身も全くこの問題を等閑に附したわけではなく、一昨年渡米した折も彼地で種々な面から検討を加えてみた次第である。そこで次に本種の学名に対する、その後の筆者の見解を述べておきたい。

結論的に言えば我国に帰化しているものは、現時点でやはり従来の筆者の見解通り、種としては広義に解釈して、*Cuscuta pentagona* Engelm., Amer. Journ. Sci. Arts 43: 340, 1842—*C. arvensis* Beyrich ex Engelm., in A. Gray, Manual Bot. ed. 2, 336, 1856—*C. arvensis* var. *pentagona* (Engelm.) Engelm., Trans. Acad. Sci. St. Louis 1: 494, 1859—*Grammica pentagona* W. A. Weber, Southw. Naturalist 13: 319, 1973. で差支えなく、もし必要ならばその種内での変種のランクで区別すればよいと思う。本種 (s. l.) は現在、アメリカ合衆国 (type locality は Virginia) は勿

論のこと、南アメリカや熱帯アメリカにも分布し、さらに広く世界各国の寄生害草として君臨しているとされている。

したがって種内変異の幅も大きいのは当然で、近年、我国でアメリカネナンカズラを *C. campestris* Yuncker に当てる向きもあるが、しかし筆者はこれを *C. pentagona* Engelm. の種内のものとして扱っておくのが妥当と考えている。勿論、彼地における多くの関連文献を披見してみると、これを種内のものとするか、あるいは別種とするかについて、多少とも異論が認められるのも事実である。しかしながら、その大勢としては最近、アメリカ合衆国における種子植物フロラの権威であるニューヨーク植物園の Dr. Arthur Cronquist ら(1984)も扱っているように、これらを広く検討してみた結果、その間に移行型も多く明確に区別できず、同一種内のものとする見解に帰着するであろう。

従来、筆者が折に触れて述べているように(植研 55: 29, 1980)、外来植物は原産地での見解を十分に勘案の上、種を大きくみて同定すべきであり、しかも彼地で近似種が多く、分類困難とされているグループについては、特にその必要性があるとしてきた。本種についても筆者は、このような観点から取扱うのが妥当であると考えていることを、重ねて強調しておきたい。

因みに今後、さらに本種が我国のみならず東亜各地に広布し、その実態がより明瞭となり、必然的に区別が必要となったならば、その時点で細分して考えても、決して遅くないと思っている。すなわち花の大きな系統(2.0-3.0 mm 許)のもの〈オオバナアメリカネナンカズラ〉 var. *calycina* Engelm., Amer. Journ. Sci. Arts 45: 76, 1843—*C. arvensis* Beyr. ex Engelm. var. *calycina* Engelm. in A. Gray, Manual Bot. ed. 2, 337, 1856—*C. campestris* Yuncker, Mem. Torrey Bot. Club. 18: 138, 1932—*Grammica campestris* Hadac et Chrtek, Folia Geobot. & Phytotax. 5: 445, 1970 と、花のやや小形の系統(1.5-2.0 mm 許)のもの〈コバナアメリカネナンカズラ〉 var. *pentagona* とに区別したらよいであろう。

終りに外来品の検討に際し、種々御援助下さっているニューヨーク植物園アジア部長兼ニューヨーク市立大学教授小山鐵夫博士を始めとする関係者各位に対し、衷心より厚く御礼申し上げたい。
(東京歯科大学)

□ Polunin, O. & A. Stainton: **Flowers of the Himalaya** 580 pp. 1984. Oxford Univ. Press, London. ¥13,500. ヒマラヤの高等植物については、我国では既に原寛、中尾佐助両博士によるカラー写真図説が出版されており、外国でも数冊が出ている。しかし、カラー写真(696 葉)つきの植物の数は本書が最も多い。印刷も上出来で、大きさも手頃である。
(小林義雄)